

社会参画の意識を高める授業の開発 —ドラマ技法を用いたレリバンスのある学びを通して—

Development of classes to raise awareness of social participation Through relevant learning using drama techniques

福井 操*
Misao FUKUI

要旨

本稿は、ドラマ技法を用いたレリバンスのある学びを授業内に組み入れて実践・検証することによって、社会参画の意識を高める授業として示すことを目的とする。本実践では1学年生徒を対象に地理的分野の南アメリカ州を教材として扱い、ドラマ技法を活用した即興劇やホットシーティング、フリーズ・フレームによりアマゾンの熱帯林減少という日本から地理的に遠い地域の社会問題を自分や生活と関連付け、自分事として解決に向けて探究させることをねらいとしている。本稿では、教材・授業開発や授業の概要、生徒のふりかえりフォームからの授業の検証、成果、課題などについて論じている。

キーワード：社会参画，ドラマ技法，レリバンス，自分事

1. はじめに

本校社会科部会（以下、部会）では、研究主題を「社会参画の意識を高める授業の創造～社会的クリティカル・シンキングをいかして～」と設定している。

2022年の成人年齢引き下げに先立ち、公職選挙法の選挙権年齢や憲法改正国民投票の投票権年齢を18歳と定めるなど、若者にも国政の重要な判断に参加してもらうための政策が進められてきている。しかし、選挙での投票率の低さからも若者の政治への無関心が明らかのように、社会参画の意識を高めていくことが重要な課題として存在する。

日本での若者の政治への無関心は今に始まったことではなく、総務省から出されている衆議院議員総選挙における年代別投票率を見ると20代の投票率は他の世代に比べて軒並み低く推移している。内閣府の「平成25年度 我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」によれば、日本人の「自国のために役立つと思うようなことをしたい」という意識が一番高いが、その傾向は、学歴が高いほど高く、一方で非正規雇用（パートタイム・派遣社員・契約社員）や無職の状態にある若者ほど低くなっている。また、「将来の国や地域の担い手として政策決定に参加したい」「自らの社会参加により社会現象が少し変えられるかもしれない」と思う若者ほど、この傾向は強い。

この分析から2つの方向性を考えることができる。1つは子どもたちの学力を伸ばすことが社会参画の意識を高めることにつながるという期待であり、もう1つは新自由主義の影響で格差社会となっているため一部の富裕層・エリート層による政治となっていく（しまっている）ことへの危惧である。後者の方向性を変えていくためには、一部の人の意見だけでなく、どんな立場の人からの意見も大切にしながら見聞を広げ、考えを深めていくことが重要であると考えた。また、これは前者の方向性で学歴が高い人が多い場合でも、さまざまな立場の人がいることを政策に反映することができる可能性を秘めていることから重要であると

* 弘前大学教育学部附属中学校 Junior High School Attached to Faculty of Education, Hirosaki University

考える。以上のことから、社会参画の重要性を鑑み、研究主題を設定している次第である。

これまで部会の授業実践や研究において、「社会的クリティカル・シンキング」については育成させる手立てを豊富に講じ、成果を得たと実感している。質問力、批判力の育成について、授業内では主にペアワークやグループワークで実施した。具体的実践としては、相互批評をKJ法で行い、批判のみならず、代替案を模索する授業が行われた。特にディベートでは自分の意見に固執しがちだった生徒が他の生徒の多様な意見を受け入れ、多面的・多角的に社会的事象を捉えられるようになった。また、歴史的分野の原始から古代史を「地域」の視点で問い直し、捉え直しを図り、身近な地域の歴史の特徴を再認識させる授業も展開された。この学習により、生徒は中央と地域の歴史との比較、関連が可能となり、歴史の視野に広がりが出てきた。クロームブックを活用した授業では、質問機能やジャムボード、スプレッドシートを活用して生徒同士が対話や発表をした。全員が短時間で意見共有できる利点もあり、部会ではこれらの取組みを多く入れた。

反面、社会参画の意識については、向上のためのアプローチが足りなかった。昨年度、本校公開研究会にて弘前さくらまつりを教材として、生徒や教師、ゲストティーチャーなど多様な他者との交流やディベートを取り入れ授業実践をした。その成果として、社会的クリティカル・シンキングは育成されたが、社会参画の意識向上については不十分であると公開研究会後の協議会でも参加者から指摘があった。また、対象だった生徒の授業のふりかえりからも社会参画の意識の向上を見取ることができなかった。そこで、今年度は社会参画の意識向上に焦点をあて、そのために、どのような手立てが必要かを探るために授業開発をした。

2. 教材・授業開発

2-1 指導の手立てについて：レリバンスとドラマ技法

レリバンスとはアルフレッド・シュッツが現象学的社会学で使用した概念である。多義的な概念ではあるが、一般的には有意性や関連性と訳され、物事を選択する際に「意味あるもの」とする基準を指す。日本では教育と社会のつながり（学校での学びが社会との関係の中でどのような意味を、どのように生み出すか）を検討する文脈でそれを社会的に分析するものや、教科論へ応用する議論が見られる¹⁾。レリバンスには社会的レリバンス、個人的レリバンス等があるが、生活や社会と学習の接点が見えたときに学びに有意義性が感じられる。このことからレリバンスのある学びを授業内で取り入れることによって、自分たちが学習していることが生活や社会につながることを実感し、社会参画への意識も高まると考えられる。本実践では単元導入において、アメリカで起こったハンバーガーの不買運動を取り上げた。ハンバーガーは生徒にとって身近な食品であり、日頃の生活と関わりが深い。このハンバーガーを巡る問題を学習で取り上げることによって、いまの学びが自分の生活や社会につながると実感できる。

そしてドラマ技法とは、何かに「なってみる」ことであり、なって考えたり、話したり、動いたりしてみることである。フリーズ・フレーム、ホットシーティング、ロールプレイ等の様々な手法がある。ある役柄を演じることで対象に迫り、その立場に立って考えたり感じたりし、目に見える世界とは別の「もう一つの世界」を手に入れることができる²⁾。また、近年では即興性も重んじられ、とくに脚本がなくてもよく、その場で他者になって考え、対話することが重視される。社会科はいかに学び手自身から距離のある社会を、自らの視点に取り込み、社会の見方や考え方を拡大深化させていくかが大切である。即興的に当事者になってみようとするこうした学習の発想は重要である³⁾。本実践ではこのドラマ技法の手法を活用して、生徒が社会的問題を自分事として捉えられるように即興劇を実施した。この即興劇の中で役割演技があるが、その役割の一つに「普通に生活している日本人」を設定した。この役割を入れることによって、先述したレリバンスを学習の中に持たせて、より身近な問題として捉え、社会的課題について「自分ならどうするか」を考えさせる手立てとして、社会参画への意識向上をはかった。

2-2 教材について：南アメリカ州

本実践の単元教材は、現在でも環境問題で揺れている南アメリカ州を取り扱う。南アメリカ州は熱帯に属している地域が多く、赤道が通るアマゾン川付近では特に熱帯林が繁茂している。熱帯林には貴重な動植物が生息しており、また、近年深刻の度合いを増している地球温暖化の進行をやわらげる役割も担っている。しかし、これまでもこの地域を中心とした熱帯林の伐採が問題視されている。規則や法律に違反した違法伐

採も目立っており、大きな環境問題となっている。反面、地球に住む人間にとっては、伐採された木が原料となりさまざまな商品が作られ、それらに支えられて生活したり、伐採した土地を牧場や農地として利用している現状もある。また、伐採に関わる産業は現地住民とも関わりが深く、その人々にとっては伐採をすべてなくすよう一概に声をあげられるわけではない。日本でも高度経済成長期に公害として水俣病が問題になったが、そのときも現地住民の中にはメチル水銀を垂れ流す企業の従業員で、雇用されることで生活が成り立っている人々もいた。このような葛藤が入り混じる社会問題について、当事者になりきるドラマ技法を用いて、様々な視点に気づかせながら学習を進めていきたい。

2-3 生徒について：生徒の実態と目指す生徒像

本実践は1学年の3学級を対象としている。本校生徒の実態として、各学級内で社会科の知識量に偏りが見られる。その中で、知識量の多い生徒の発言が目立ち、社会科の成績が良くない生徒は発言が少ない傾向にある。そのため、知識量の多い生徒は自分の意見が正しいと考え、それ以外の発言を参考になるものと考えない場合が多い。その一方で、社会科の成績は高くないが、社会科への興味が高く意欲的に発言する生徒も一部に見られる。そのような生徒の発言は、知識が定着していないための外的な聞こえ、教室内で否定されることもある。しかし、そのような意見を丁寧に紐解いていくと、知識量の多い生徒が気づいていない角度から考えている場合がある。

部会ではこのように本校生徒の実態を捉え、次のような目指す生徒像を設定している。

目指す生徒像

- 社会的事象をあらゆる面から明らかにしようと取り組む生徒【知識・技能】
- 自分の意見や考えを別の視点から捉え直し、自分の考えを説明しようとする生徒
【思考力・判断力・表現力】
- 正しいと思った意見や考えを問い直そうとする生徒【主体的に学習に取り組む態度】

3. 授業の概要

3-1 単元の指導プラン

単元の指導プラン（8時間扱い、本時は7時間目）

時	主な学習活動	評価規準〈評価方法〉	C評価の生徒への手だて
1	<ul style="list-style-type: none"> • 単元課題を把握し、学習に共通しをもつ。 • アメリカのハンバーガー不買運動から、熱帯林に関わる開発と環境保全の実態を把握し、社会的諸課題に関心をもつ。 	主〈フォーム〉 熱帯林に関わる開発と環境保全の問題を身近な生活と関連付けて捉え、社会的諸課題に関心をもち探究、解決しようとしている。	<ul style="list-style-type: none"> • 実物教材を持ち込み、実際に手に取らせるなど、普段の食生活を想起させ関連付ける。 • 動画や写真など具体的な資料を多く提示し、分かりやすくする。
2	<ul style="list-style-type: none"> • 熱帯林が人や地球に与える良い影響を調べる。 • ノートに案を箇条書きする。 • ノートを持参し立ち歩き、他生徒と自由交流。良いと思った案を書き足していく。 • ジャムボードを使って班で意見を集約。ジグソー形式で他班とも意見交流。 • 学級全体発表。 	知／思〈ジャムボード、フォーム〉 熱帯林が人や地球に与える良い影響について、多様な資料を活用して調査し、また、他の生徒との意見交流によって、多様な視点をもって認識を広げ、深めている。	<ul style="list-style-type: none"> • 自分の案を書かせるときに、参考にできる教科書・資料集の部分や、検索ページを具体的に教える。 • 自由交流の場面で一緒について歩き、他の生徒の意見のどの部分をどう取り入れるかを具体的に指示しノートに書きこませる。

3	<ul style="list-style-type: none"> 熱帯林減少の原因を調べる。上記「熱帯林が人や地球に与える良い影響を調べる。」と同様の活動。 	<p>知／思〈ジャムボード、フォーム〉</p> <p>熱帯林の減少の原因について、多様な資料を活用して調査し、また、他の生徒との意見交流によって、多様な視点をもって認識を広げ、深めている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 自分の案を書かせるときに、参考にできる教科書・資料集の部分や、検索ページを具体的に教える。 自由交流の場面で一緒について歩き、他の生徒の意見のどの部分をどう取り入れるか具体的に指示しノートに書きこませる。
4 1 8 本 時	<ul style="list-style-type: none"> ドラマ技法のアクティビティとリサーチワークの輪廻展開リサーチワーク後、修正したアクティビティで再度表現。活動からの疑問をリサーチワーク。その繰り返し。 活動前にウォーミングアップ。フリーズ・フレームで熱帯林減少の原因を表現し、教師や他班が質問。熱帯林に関わる開発と環境保全について、立場に分かれてディベート。 立場を決めて即興劇。 導入と終末でふりかえりフォーム（自己変容認識）。 	<p>主〈観察、フォーム〉</p> <p>アクティビティによって、自分事として熱帯林の問題を捉え、当事者意識をもって探究、解決しようとしている。</p> <p>思〈ドキュメント〉</p> <p>アクティビティから疑問や認識転換の必要性に気づき、それをもとに多面的・多角的な視点からリサーチワークを進め、本質的因果関係に迫ろうとしている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> アクティビティに苦手意識がある生徒のために、「歩いて集まれ」「フォーコーナーズ」「アクション回し」などのウォーミングアップをあらかじめ十分入れてから実践する。 アクティビティから気づいた疑問や考える必要がある部分を黒板に板書し、その後のリサーチワークを行いやすくする。 リサーチワーク作成は「課題」の形式でドキュメントを使用し、教師が閲覧して支援が必要であれば個別コメント機能を活用してコメントを送る。

※知…知識・技能 思…思考力・判断力・表現力 主…主体的に学習に取り組む態度

3-2 本時の展開

本時のねらいは即興劇やリサーチワークを通して、当事者意識をもって熱帯林減少に関わる開発と環境保全を考え、問題への探究を深めることである。現地住民、伐採業者、保護団体、普通に生活している日本人の4つの立場になりきり、熱帯林の伐採現場や日本人がハンバーガーを食べる場面など具体的なシチュエーションを演じる。その後、教師や他の立場の生徒が質問をして、そこで出た疑問や調べたい部分をリサーチワークにいかし、学びを深める活動にしたい。

本時の展開

	教師の働きかけ	予想される生徒の反応や活動	評価・留意点
導入 5分	1 挨拶 2 前時の振り返り <ul style="list-style-type: none"> 前時の振り返りフォームを確認させる。 前時に行った即興劇をふまえて、熱帯林減少について疑問や調べてみたい点をジャムボードに入力させる。学級で整理。 教師からも前時の即興劇の疑問などを提示。 	<ul style="list-style-type: none"> 前時の振り返りフォームを確認。 班のデータに入り、疑問や調べてみたい点をジャムボードに入力。 	<ul style="list-style-type: none"> 前時の振り返りフォームの確認では、開発と環境保全について自身と学級でどう考えていたかを見直させる。 モニターで前時の即興劇を流して想起させ、疑問などを出しやすくさせる。
	3 学習課題の提示 4 リサーチワーク <ul style="list-style-type: none"> ドキュメント「課題」共有。 	<ul style="list-style-type: none"> 疑問や調べてみたい点を教科書、資料集、検索で調べ、ドキュメントに入力。 互いに閲覧、コメント付け。 	<ul style="list-style-type: none"> 教師が閲覧して支援が必要であれば個別コメント機能を活用する。

展開 35分	<p>5 2回目の即興劇</p> <ul style="list-style-type: none"> • 現地住民、伐採業者、保護団体、普通に生活している日本人の4つの立場。 <p>①教室会場作りの指示。 ②シチュエーションを決める。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 熱帯林の伐採現場（現地住民、伐採業者の班が演じる） • 日本人がハンバーガーを食べる場面（普通に生活している日本人、保護団体が演じる） • 熱帯林を切って農地を切り拓く現地住民を見た日本人観光客（現地住民、普通に生活している日本人が演じる） <p>*出てきた疑問などについて、担当の班が板書。 *それぞれの即興劇では演示後、教師や他の立場の生徒による質問を行う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 机を寄せて、教室中央をあける。 • シチュエーションを理解し、立場になりきって演じる。 • 自分の思いを相手に伝える。 <p>• 板書役の班は即興劇を通して出てきた疑問などを板書。</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 他班は演示を自分の立場の人間として見て、疑問や意見を伝えるよう指導。
まとめ 10分	<p>6 ジャムボード入力</p> <ul style="list-style-type: none"> • 疑問や調べてみたい点を再度入力させる。班で共有。 <p>7 振り返りフォーム</p> <ul style="list-style-type: none"> • ほぼ全員が入力し終わったら、共有設定。 <p>8 挨拶</p>	<ul style="list-style-type: none"> • ジャムボードに疑問や調べてみたい点を入力。 • 班で共有し、追加があれば、さらに付け足す。 	<ul style="list-style-type: none"> • 振り返りフォームでは、前時と比べて自身、学級がどう変わったか、変容を自己認識させる。

4. 授業を終えて

4-1 生徒のふりかえりフォームから

部会ではグーグルフォームを活用して、授業や単元後にふりかえりフォームを生徒に実施している。本実践でもこのふりかえりフォームを活用し、生徒の変容を見取るために単元初頭と単元終了時で同じ質問をした。質問は「熱帯林減少の解決のために、自分から取り組む意欲はどのぐらいか？」であり、スケールでの意欲の度数の選択と自由記述の項目を設定した。対象生徒は前述したように、1学年の3学級である。

(1) スケールでの意欲度数の選択

【熱帯林減少の解決のために、自分から取り組む意欲はどのぐらいか？】

意欲の度数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
単元初頭 (%)	0	0	3	1	9	12	13	25	16	21
単元終了時 (%)	0	0	4	1	4	11	20	23	19	18
終了時—初頭	0	0	+1	0	-5	-1	+7	-2	+3	-3

※意欲の度数は「1」に近いほど意欲が低く、「10」に近いほど意欲が高い

※%は小数点以下を四捨五入

この表からは、意欲の度数が「7」「9」の生徒が単元初頭と比べて増えており、全体として見ても概ね意欲の向上が見られる。このことから、本実践を通じた社会参画の意識の高まりが確認できる。

(2) 自由記述の項目

単元初頭と単元終了時で、解決に前向きな記述と解決に難しさを感じている記述に分けて示した。なお、複数の同意見を福井がある程度まとめた形で掲載した。

①解決に前向きな記述

単元初頭

- ・熱帯林の減少を防ぎたい。
- ・熱帯林が減少しているので、増やしていきたい。
- ・熱帯林は大切な存在だと思った。
- ・熱帯林は重要である。
- ・森林伐採は人間や動物に影響があるのでやめるべき。
- ・熱帯林は環境保護に役立っているので残していきたい。

単元終了時

- ・熱帯林の減少について初めは他人事として捉えていたが、今はしっかり考えなくてはならないと感じた。
- ・熱帯林は自分たちが暮らす場所から遠いところにあるので、自分には無関係と考えていたのが熱帯林を守らなければいけないに意見が変わった。
- ・南アメリカ州の熱帯林は私たちには関係ないと思っていたが、地球温暖化を抑える効果や熱帯林にさまざまな人が関わっていることが分かり、これから熱帯林の減少を止めるために自分にできることをやろうと思った。
- ・最初、南アメリカ州はあまり自分に関係ないと思っていたが、単元を通して私たちにもかなり関係しているという実感が湧き、私たちにもできることを少しずつやっていきたいと思った。
- ・即興劇やディベートなどを通して、違う視点からの考え方を知り自分の意見がかなり変化した。熱帯林減少は他人事ではなく、自分たちで解決をしなければいけない問題だと痛感した。まずは自分ができることをして少しでも役に立ちたい。
- ・「環境保護団体」と「普通に生活している日本人」の即興劇で、ハンバーガーを食べている人が「自分ひとりに言われても」と言っていたが、そうではなく、そういう人たちが多くからこうなるので、まずは自分からという人が多くなれば、改善されていくと思うし、自分もそうしていきたい。

単元終了時の記述では、単元初頭と比べて課題を自分事として捉えている。単元内での即興劇などのドラマ技法を通して、様々な立場の視点を獲得して問題を深く理解した上で自分の問題として捉えるようになった様子を読み取れる。また、それを受けて自分でできることは何かを真剣に考えようとしており、遠く離れた南アメリカ州の社会問題と自分を関連付けて解決しようという意欲の向上を見取ることができる。ハンバーガーの話を書いた生徒も多く、ここでも身近な生活と自分を関連付けて問題を考えたことがうかがえる。

②解決に難しさを感じている記述

単元初頭

- ・熱帯林減少はインフラも関係しているの、減少をとめるのは難しいと思った。
- ・(南アメリカ州は) 関わりが遠すぎて理解しづらく、自分と関連させることが難しかった。

単元終了時

- ・即興劇やフリーズ・フレームを通して、現地住民や伐採業者の気持ちがわかった。環境と開発のバランスを取ることは実はとてもむずかしいことだと思った。
- ・熱帯林の伐採によって、環境には良い影響があるが、逆に生活に不便が出る人もいて、バランスを取ることが難しいと思った。
- ・現地住民になって演じたが、現地住民ならではの問題点があったのでそのことについても考えていき

い。世界中の人達がこの問題について考えられたら良いと思う。

- 最初、熱帯林は守ることだけを考えていたが、みんなで即興劇や調べ学習をすることによって「守るだけでいいのか？」と思い始めるようになった。
- 環境のみを考えて開発を全くしないことも問題がありそうだし、開発ばかりを進めて環境を守らないこともだめ。環境と開発のバランスが大事である。
- 厳しい現実を知った。環境問題についてまずは知ることから始めたい。
- 即興劇でそれぞれの立場からの主張はそれぞれで一理あると思う。難しい問題だと思った。

単元初頭では解決に難しさを感じている記述はほぼ見られなかった。また、記述があっても内容に具体性がなく、自分の問題として引き寄せられていない様子も見取ることができる。一方、単元終了時では即興劇やフリーズ・フレームなどのドラマ技法やリサーチワークを通して、多面的・多角的に課題を理解したことによって、解決の難しさを実感した記述が多かった。問題を自分と関連付け、より自分事として捉え、解決の実現可能性を具体的に想起したからこそその記述であると考えることができる。

4-2 本実践の成果と課題

成果としては、ドラマ技法を用いたレリバンスのある学びを授業内に組み入れ実践することによって、地理的に離れた地域の社会的問題であっても多面的・多角的に理解して自分事として捉え、解決に向けて社会参画の意識が高まることがわかった。このことは、前述の生徒のふりかえりフォームの分析から言える。今後の課題としては、地理的分野のみならず、歴史的分野や公民的分野でも本実践の手法を演繹し、社会参画の意識を高める授業の手立てとして汎用性を高めることである。

【註】

- ¹⁾ 棚橋健治・木村博一『社会科 重要用語事典』明治図書 p.126, 2022年
- ²⁾ 宮崎充治・獲得型教育研究会『ドラマ技法&アクティビティ 50』明治図書 p.13, 2020年
- ³⁾ 棚橋健治・木村博一『社会科 重要用語事典』明治図書 p.179, 2022年

【参考文献】

渡部淳・獲得型教育研究会『学びを変えるドラマの手法』旬報社, 2010年
渡辺貴裕・藤原由香里『なってみる～演劇の手法で変わる授業と学校』時事通信社, 2020年
渡部淳・獲得型教育研究会『参加型アクティビティ入門』学事出版, 2018年
石牟礼道子『苦海浄土』講談社, 1969年